

永 積 昭 著

『オランダ東インド会社』

近藤出版社(世界史研究双書⑥)1971年 212ページ

I

オランダ東インド会社……正式の名称は連合東インド会社 (Vereenighde Oost Indische Compagnie) ……の名ほどの西洋史の教科書にも1度は必ず登場するいわば西洋史定食メニューの一つであるが、そのくせその内実と歴史的役割は名前のポピュラーさに比してあまりよく知られていない。本書はこのオランダ東インド会社の歴史を、その誕生から解散まで、原史料を駆使して描いた日本語での最初の概説書である。

著者はオランダ、アメリカでの長い留学生活のみならず、インドネシア大学文学部への出講の経験もあり、オランダ語、インドネシア語ともに堪能な数少ない本格的インドネシア史研究者の1人である。また主著に、*The Origin and the Earlier Years of the Budi Utomo: 1908-1918*、『東南アジアの価値体系Ⅱ、インドネシア』(共著)などがあり、現在、東京大学文学部助教授の職にある。

以下、はじめに本書の概要を紹介し、そのあとで若干の論評を加えたい。

II

本書の構成は8章からなっている。まず第1章では、オランダ東インド会社(以下、単に東インド会社と略す)登場以前の東インド地域における諸情勢……とりわけ香料をめぐる貿易地図……を概観しながら、われわれに必要な十分な予備知識を提供してくれる。次の第2章では、オランダの国情および東インド会社設立の経緯を、続く第3、4、5章では、17世紀をつうじて現地における東インド会社の地歩の確立とその力強い発展の過程を、対日貿易をも含めて扱っている。一方、後半の6、7章では18世紀における東インド会社の領土的拡大とそれとは裏腹の会社の斜陽化の進展を跡づけ、最終章で、その解散の経緯をほかならぬオランダ本国の歴史の歩みの中で位置づけている。以下、各章の内容をより詳しく紹介してみよう。

第1章 香料への道: はさきにも言及したように、オランダの東洋進出(16世紀末)以前の東インド地域に関

する必要不可欠な予備知識を与えてくれるもので、(1)マラッカ海峡をめぐる諸国家の興亡——特にマラッカ王国の歴史——、(2)東インド海域における東西貿易、南北貿易(同地域と中国との貿易)の状況、(3)香料についての懇切な説明、(4)当時のポルトガル、スペインといった西欧勢力の当該地域における動向、(5)16世紀にはいつてジャバに起こりつつあった変化、などを手際よくまとめている。

このような叙述の進行のなかでも、著者が特に力を入れている点は、香料の説明と当時の当該地域における貿易図の解明である。まず香料について、次のようなことを教えてくれる。香料——ここでは香辛料を意味する——とは、胡椒、カルダモン、ジンジャー、肉桂、チョウジ、ニクズクなどをさすが、いわゆる香料貿易といわれるときの対象は、狭い意味でスパイスと呼ばれる、チョウジとニクズクの二つである。チョウジはモルッカ諸島、ニクズク——その種子がナツナグで花がメイス——はバンダ諸島を主産地として、当時他にはどこにも産しなかった。なお、これらのヨーロッパにおける用途は調味料としてはもちろんのこと食用肉の貯蔵用としてより重用されたということである。

次に、当該地域における貿易地図に関して、著者は、「アジアとヨーロッパとの海上交通はポルトガル人の来航に先だつて一千年ものあいだ、アジア各地の商人達が作り上げて来た精緻な網の目であつて……」(16ページ)、「ポルトガルが登場するまでの間に織られた国際貿易は今さら急にデザインを変更できるものではなかった」(22ページ)と述べて、ポルトガルの東洋進出は、西洋中心の従来の歴史学の中で、いささか高く評価されすぎている、と指摘している。一方、ポルトガル人の介入が一本の新しい糸であつたことは、紛れもない事実であり、このポルトガルのマラッカ占領(1511年)を契機として、マラッカを避ける航路が誕生し、それがパンテン(ジャワ西端)とアチュー(スマトラ北端)という二つの貿易国家を発展させることになった、という事実認識を提出している。

最後に、ヨーロッパの政治情勢に若干言及しながら、ポルトガルの衰退とオランダ艦隊の東インドへの最初の到達(1596年)を記して、この章を終えている。

第2章 V.O.C.の誕生: はいわば東インド会社設立前史とでもいうようなもので、同会社が誕生したほかならぬオランダの風土と歴史、独立戦争の経過、当時のオランダ商工業の状態、東インド会社設立の経緯、さらに

は東インド会社の性格などをわかりやすく整理している。紙数の関係もあり、ここでは行論の関係上本書の理解に必要な不可欠なテーマだけにしぼってその概要を紹介するに止める。

まず当時のオランダ経済の状態についての著者の認識は以下のように要約できる。すなわち、元来、南部ネーデルランドのフランドル地方は、毛織物が盛んであったが、独立戦争の激しい攻防戦で商工業者は大挙して北部（オランダ）に移住してきた。その結果、繁栄しつつあった毛織物業は新大陸へのオランダの輸出産業として最も重要なものとなり、新大陸の豊富な銀はスペインを素通りしてオランダに流入した。この銀こそ香料などを主とする東インド貿易にとって不可欠の商品であった。

次に、著者は東インド会社設立の経緯をおよそ以下のように略述している。1590年代、東インド航路に関する情報の入手と北部に定住するようになった南部ネーデルランド商人の豊富な資金が支えとなって、いくつかの航海会社——遠国会社、新航海会社など——が設立された。これらのうち、1600年に前記諸会社が合併してできたアムステルダム東インド会社は、アムステルダム市当局からアムステルダム商人間における貿易独占権を与えられていたが、その後、これに似た形式の会社がミッデルブルフ、ロッテルダム、デルフトなどオランダ各地の港に林立するに至った。この間、14の会社が60余隻の船を東インドに派遣し、競争激化から利益の減少を招いたので、連邦議会は諸会社の統合の必要を感じ、1602年、連合東インド会社（V. O. C.）の設立に踏切った。

さて、このようにして設立された東インド会社の性格はどのようなものであったろうか、著者はその特色として以下の諸点をあげている。すなわち、第1に、それは、大塚久雄氏によってつとに説き明かされているごとく、なお不完全さをもちつつも、当座企業的性格を止揚している点において世界最初の株式会社であるということ。第2に、それは、「17人会」（Heeren XVII）といわれる重役会の権限——この権限の行使可能地域は喜望峯の東、マジェラン海峡の西——の内容からして、オランダ本国では特許会社にすぎないが、ひとたび喜望峯を回れば国家に等しい権力をもっていること。第3に、それは、「17人会」やその下にある取締役会も含めて、はなはだ専制主義的で、経理内容を一切公開せず、配当も恣意的に決めるという非合理性を有していること。なお、この傾向は以後200年の会社の存続期間中、遂にほとんど改革されなかった。第4に、その規模は当時として桁外れに大

きいこと——オランダ東インド会社の資本金650万グルデンに対して、イギリス東インド会社の第1回航海のための起債額は6万8000ポンド（53万グルデン）と10分の1以下である——。

第3章 征服者クーン：は東インド会社の現地における基礎固めとその後の会社の力強い発展の過程を、第4代、第6代の東インド会社総督となったヤン・ピーテルスゾーン・クーンの努力を中心として跡づけている。この過程はさらに四つの時期に分けられる。すなわち、第1期はバンテンの商館建設（1603年）からクーンによるジャカルタ——後にクーンによりバタヴィアと改名される——占領（1619年）まで。第2期は第4代総督クーンの治世（1619～23年）。第3期はアンボンの虐殺（1623年）からマタラムのバタヴィア包囲（1628～29年）まで。第4期はそれ以後の第9代総督ファン・ディーメンの時代（1636～45年）。

第1の期間中、会社はポルトガルを蹴落し、イギリスと相争いながら、根拠候補地を探知するべく東インド各地の君主達と友好条約を結び、各地に次々と商館を設けていく。この期間における最大のハイ・ライトは、クーンによるジャカルタの占領であるが、それに先だつジャカルタとの交渉の成功と条約の締結（1610年）——商館と倉庫の建設許可を得る——の歴史的意義も決して小さくはない。第2期における叙述の中心は、クーンによるバタヴィア（オランダ民族のラテン名）市建設の事業に関するものである。かれは原住民と華僑の移住を推める一方、かねてよりの主張に従って本国からのオランダ自由民の移住を要請し、同市の建設を進め会社の基礎をほぼ固める。しかし、そのクーンも1621年のパンダ諸島征服の後、23年には辞任することとなる。第3期はアンボンの虐殺——オランダ要塞攻撃の計画ありとして、アンボンのイギリス商館員10名、日本人10名、ポルトガル人1名の全員が死刑に処せられたという事件——で幕を切って落されるが、これが契機となってイギリスは香料諸島から手を引き、さらにはジャワでも挫折し、遂に17世紀後半には対東インド政策の大転換をはかることになる。一方、16世紀前半マジャパイト王国の衰退に際して、ジャワ北岸の小国の反乱を押えこれを併合したスナパティの建国になるマタラム王国は、領土の西方への拡張を望み、2回にわたってバタヴィア城に対して大規模な包囲戦を試みたが、東インド会社はこれを苦戦の末守り抜き、その後はその安定度を増していった。第4期にはいと、バタヴィアの町の形成は進み、香料諸島の争乱も一時収拾、

対日貿易では西欧の国として唯一国通商を許され、セイロンからポルトガル人を追払い、マラッカを占領（1641年）してポルトガルに対する勝利を決定的なものとする。このようにして、東インド会社は第9代総督ファン・ディーメンの時、その黄金時代を迎えるのである。しかし、著者は、この時すでにオランダ国民のなかに小成に安んずる気分が見えている（86ページ）、とするどく指摘することを忘れていない。

第4章 日本貿易：は目先を変えて、17世紀前半におけるオランダの対日貿易に光を射せている。すなわち、(1)対日貿易におけるオランダの地位の確立までの経緯——オランダ船リーフデ号の豊後漂着（1600年）、平戸商館の開設（1609年）からイギリスの平戸商館閉鎖（1623年）までのイギリスとの確執——、(2)対日貿易における対中国貿易の不可欠さとそれに伴う中国貿易をめぐる台湾における日本商人とオランダ人との対立、(3)一連の鎖国令発布に伴うオランダの対日貿易における優位確立とその犠牲度——パンカド（生糸の一括購入）方式による買ったたき、島原の乱における踏絵の協力要請、在日オランダ人の生活上の束縛など——、(4)対日貿易における取引の方法と取引の対象——生糸、織物、皮革類（以上、輸出品）、銀、金、銅の地金または貨幣、樟腦（以上、輸入品）——、(5)東インド会社にとっての対日貿易の重要性——日本商館の利益は東インド会社管内の商館のなかで群を抜いており、他の商館の欠損を補ってあまりあるものであった——など、対日貿易の全貌をほぼ明らかにしている。われわれはこれによって、日本にあったオランダ商館がほかならぬ東インド会社の下にあったという当りまえの事実を改めて認識すると同時に、利にさといオランダ人が、幾多の屈辱にもめげずに日本との貿易を継続した理由を今、十分に理解することができる。

第5章 陸にあがる：は従来、領土に対してほとんど無関心であった東インド会社が、1650～80年代にかけてのインドネシア内諸王国の内紛に干渉して、貿易上の特権を獲得しながら、徐々に土地自体にも関心をもちだし、内陸に領土を拡張していく過程を扱っている。

この過程はその前段階を含めて、さらに三つの時期に分けることができる。著者によれば、第1期は1635年以降、マタラムの政策転換——オランダへの反抗を諦め、鋒先を東に向ける——に合わせて平和条約を締結する（1646年）までの時期で、東インド会社は領土に対してまだ積極的な関心をもっていない。第2期は第12代総督マーツァイケルの下（1653～78年）で、モルッカ、ティ

ドーレ、テルナテ、マカッサルの叛乱の鎮圧ないしは内紛に介入することによって、インドネシア諸島東半分を会社の勢力下に置く——これらは1667年の「ボンガヤの和約」によって達成——一方、アチーの衰退に乗じてスマトラ各地、特に西海岸諸地域を会社の保護下におく時期。会社は今までにない積極性を示しているが、依然として貿易独占を唯一最高の目的としている点で根本的には変わっていない（127ページ）、と著者は断ずる。第3期はファン・フーンズ、スペールマン両総督の下、トゥルノジョヨ（マドゥラ王子）の叛乱によって弱体化したマタラムと一連の有利な条約を結び（1677～78年）、続いてバンテンの内紛への介入によって会社の特権を大幅に認めた条約を締結する（1684年）時期。この時期になると会社もはっきり国境確定に最大の関心をもつようになってきている。一方、ジャワの王権はことごとく東インド会社の承認と保護を必要とし、会社の優位はゆるぎないものとなっている。

結局のところ、第2期はいわば過渡期であり、内政不干渉の原則を堅持したマーツァイケルの死後、ファン・フーンズを経てスペールマン総督の時代になって会社の方針は転換する。そういう意味において、スペールマンがはじめ商人であり、やがて情勢の命ずるままに提督や将軍にもなったことは、ちょうどオランダ東インド会社の運命の縮図とでもいえる、と著者はいう。

第6章 塗りこめた首：は18世紀前半における東インド会社のジャワ社会への内部浸透を二回にわたる王位継承戦争への介入と二つの大きな事件を通して扱っている。

著者はいう。「内外の競争者を排除し終わった今、皮肉にも会社の将来性はいつの間にか萎みかけていた。」（141ページ）。そして、会社の財政状態は、戦費の増大、領土拡大に伴う各種経費の増加、貿易額の減少などによって決して満足すべきものではなかった。18世紀初頭の東インド会社は、およそこのような情勢に置かれていたのである。

このような状態のなかで起こった第1次ジャワ継承戦争（1704～08年）はマタラム王アマクラット2世の死によって生じた王子と王弟との間の王位継承争いであり、第2次ジャワ継承戦争（1717～23年）とは第1次継承戦争で勝利を納めたパクブウォノ1世（前王の弟）の死によって引き起こされた長子対弟および叔父の王位継承争いであるが、著者は、これら2回の王位継承戦争において、東インド会社はその一方に加担して、それを勝利に

導き、その代償として領土を拡大し、発言権を増大させていく経過を要領よくまとめている。

次に18世紀半ば頃のバタヴィア市の概観を示したのち、1721～22年のエルベルフェルト事件——ドイツ系混血の老人ピーテル・エルベルフェルトとジャワの貴族カルタ・ドゥリアらがジャワのヨーロッパ人を皆殺しにし、バタヴィアを奪い返す陰謀をたくらんだとして捕えられ、拷問自白ののち両人は野蛮な方法で処刑されたという事件。のみならず、エルベルフェルトの頭部は野鳥のつづくにまかされ、かれの頭蓋骨は石の記念碑に塗り込められた——と続いて1740年に起こった「バタヴィアの狂暴」と呼ばれる動乱——バタヴィア華僑の暴動とこれに対する、誤解と恐怖に基づいたオランダ人と現地人による華僑の虐殺——の詳細にふれ、植民地支配の残忍性と当時の東インド会社のバタヴィア支配の不安定さを抑制的にではあるが印象的に描いている。

最後にその後の東インド会社とマタラム王国との関係に言及して、パクブウォノ2世の失政による会社の領土拡大とそれに伴うマタラムの、会社への正式な属国化(1743年)の経緯が述べられている。

第7章 ジャワの支配：は18世紀半ばにおける東インド会社建直しの試みと半ば以降のマタラム王家の相つぐ分裂に伴う東インド会社による全ジャワ支配の完成の経過を扱っている。

著者はまず、この会社建直しの主人公、第27代総督ファン・イムホフの基本的な考え方を、かれが総督就任前に会社首脳部に提出した「東インド会社の現状についての考察」という意見書に拠って明らかにする。ファン・イムホフの基本認識とは、「会社の欠点は商人と国家元首という二つの異質なものを無理やりくっつけたところであり、商業会社にはこの二重の仕事を遂行する能力はない」というものであるが、著者はこのような基本認識に基づくかれの意見書の各論——貿易、航海、領土保有、内政——の内容を紹介したのち、会社首脳部によってその大部分が認められた基本的政策のイムホフによる実践を跡づける。しかしその結果は、ファン・イムホフの精力的な行政施策にも拘らず、会社の独占会社としての特権的な経済的地位には少しの変化もなく、人々は目前の腐敗を改善することばかりを論じ、原因の根絶には思い及んでいなかった(177ページ)と著者はいう。

次に、第3次ジャワ継承戦争(1749～55年)——パクブウォノ2世の死による実子パクブウォノ3世と叔父マンクブーミならびにいとこマス・サイドとの争い——の

経緯が述べられるが、この戦争の結果、マタラム王国は、スラカルタを都とするススフーナン・パクブウォノ3世と、ジョグジャカルタを都とするスルタン・アマンクブウォノ1世(マンクブーミ)と、さらにはススフーナンの領土を一部譲り受けたパンゲラン・マンクスガラ1世(マス・サイド)の三つの系譜に分割されることになる。一方、バンテン王国も内紛が東インド会社の介入を招き、1752年の協定によって会社の保護領となり、これ以後はあらゆる点で宗主国としての会社の統制の下に置かれるようになる。

かくして、われわれは18世紀末において、全ジャワの支配をほぼ完成させた東インド会社を見るのである……。

第8章 落日：はオランダに生まれた東インド会社が東インドではなく、ほかならぬオランダで死んでいくまでの経緯を概観している。

すなわち、著者は、オランダ文化の最盛期であり、「黄金の世紀」といわれた17世紀と「かつらの時代」と呼ばれる18世紀とを対比し、文化の沈滞が政治・経済上の衰退と同じ道を多少の時期的ずれはあるにせよ、ほぼ正確にたどったことを各種の史実の上から確認する。次いで東インド会社の不振の原因を(1)18世紀後半以降の東インドにおけるイギリス勢力の伸長、(2)スマトラ、カリマンタン、モルッカにおける貿易の不振、(3)戦費等の出費による東インド会社財政の破綻、に求めている。さらに、従来と違って会社解散を大前提としたホーヘンドルプの東インド会社改革案(1792年)の内容を紹介したのち、この改革案が顧られないままに、フランス革命軍のオランダ侵入(1794年)から、バタヴィア共和国の成立(1795年)を経て、1799年の解散までひた走りする東インド会社の臨終の模様を素描している。

そして、最後に著者は、「軍事的に弱少なオランダは常にヨーロッパ大国間の——とくにイギリスとフランスとの間の——勢力争いに巻き込まれる危険をはらんでいた。保身のための外交には理念や原則は必要ではない。連邦議会を支配していたオランダの商業ブルジョアジーは、利潤追求の技術屋であった。そしてオランダ東インド会社を支配していたのはほかならぬかれらだったのである」という文章で本書を結んでいる。

III

以上が本書の概要である。一読してまず痛感したことは、空間的にはヨーロッパとアジアにまたがり、時間的にもほぼ200年に及ぶオランダ東インド会社の複雑な歴

史を、非常にうまく整理し、読みやすく書いているということである。特に香料その他の説明など周到な予備知識の提供と地図、図表、年表などの適切な利用は、読者の理解を助ける上で非常に役に立っている。さらに、史実の詳細さにも拘らず、上手な章別構成が全体として歴史の推移を把えるのをきわめて容易にしている。見事な構成力といわざるを得ない。

ところで、著者は「まえがき」において、「東インド」に重きを置いた、いわば「オランダ東インド」会社の歴史を意図したと述べており、したがって、本書の特色は、(1)「東インド」中心、(2)「被支配者側の歴史」の尊重、(3)何年何月までも明確にする「歴史的に詳細な叙述」という3点にあるとしている。そこで、筆者もこれらの3点について著者の意図がどの程度生かされたか、またそれがどんな副産物をもたらしたかという観点から本書に若干論評を加えてみたい。

第1の点については、インドネシア内部諸国家の動向、東インドにおける西欧勢力の力関係、東インド会社のお膝元パタヴィアの様相など東インド全般の情勢を背景として東インド会社の動きを把えており、所期の意図はほぼ達成されている。ただその結果、特に18世紀のオランダの国内状況の東インドへのはねかえりが表現の上では軽視されており、章別編成を東インド中心、本国中心ときれいに分けてしまったために、かえってそのダイナミックな動きを把えきれなかった面がある。さらに欲をいえば、東インド会社総督府内の動きをもう少し描いて欲しかった。

次に第2の点については、史料上の制約にも拘らずインドネシア内部諸国家の動向がかなり詳細に扱われており、かれらが東インド会社の巧妙な政策の前にもろくも崩れ去り、会社の支配を甘受せざるを得なくなっていく経過が生き生きと描かれており、ほぼ成功しているのではなかろうか。しかしこれとても、ないものねだりになってしまうかもしれないが、東インド会社に対する原住民側の反響、反応がもう少しストレートにわかればなおよかったと思う。

さらに第3の点については、従来の類書よりかなり詳しく書かれているし、それでいて全体の流れは決して乱れていない。まさに著者の並々ならぬ力量がうかがえる。ただ反面、詳述の結果、東インド会社の何たるかは解るのであるが、オランダとインドネシアにとって、これが果たした役割が一体なんであったのか、かえってあまり鮮明にはなっていない感じがする。しかし、いずれにせ

よ全体として見れば、「オランダ東インド」会社という著者の意図は見事に達成されているといえよう。

さて、最後に若干気のついた点を記しておく。まず第1に、用語の厳密な意味内容の説明不足——一定の歴史的文脈における「保護領」、「属国」、「宗主国」等々の用語の実質的内容がいまだはっきりしない点があった——第2に、東インド会社の経済状態に関する記述の相対的少なさ——東インド会社の貿易、財政等の経済状態に関する数字に裏づけられた表現が比較的少なかった——、第3に、史実の順序の錯覚——オランダの独立宣言とスペインの無敵艦隊の敗北——(37ページ)、第4に用語の不一致——東インド評議員と東インド参事会員——(148ページ)、第5に地名などオランダ語の発音についての問題——やはり、レイデン (Leiden)、フルデン (Gulden)〔貨幣名〕と記して欲しかった——。とはいえ、上述の諸点は本書の価値をいささかも損うものではない。

以上、いろいろ勝手な論評を加えてきたが歴史の専門家でない筆者の読み違い、不勉強のため、とんだのはずれの指摘をして多々非礼もあるかもしれないが、その点はお許し願いたい。筆者は、著者がこれに続いて、オランダ東インド会社の崩壊から20世紀初頭までのインドネシア史をできるだけ早い機会に執筆されることを切に願うものである。

(一橋大学大学院 内藤能房)